

# 令和6年度 国富小学校 研究の概要

## I 研究主題

言葉への自覚を高めることのできる子どもの育成(4年次)  
～思いをもち、自分のよさや考えを自覚することのできる「書く」活動の取り組み～

## II 研究主題設定の理由

現代の子どもたちは一般に「書く」ことに対する苦手意識が強いとされる。文化審議会の議会答申には『これは何をどのように書いたらよいか十分に指導されていないことに加えて、忍耐強く一つのことに取り組もうとする力が不足している面もあろう。』と記述されている。また、全国学力調査の毎年傾向を見ても、記述式解答の正答率の低さや無答率の高さにそのことが顕著に表れている。しかしながら、価値観の多様化が広がる現代において、私たちは日本人としての自己を確立しつつ、膨大な情報を素早く正確に判断・処理しながら多様で円滑なコミュニケーションを実現していく必要があり、そのためには『国語力の中核の一つとして「考える力」をあげ、その育成の中心は「書くこと』(文化審議会答申より引用)であるということ念頭に置かなくてはならない。

本校の児童について考えると、書く力の基盤となる生活において、例えば活字離れ、読書量の低下、メディア時間の増加など、考えたり書いたりする必要のない時間が大幅に増えている実態がある。学校での「書く」活動においては、書くことを面倒だと感じたり、どう書いたらいいかわからないためになかなか書けなかったりする姿が見られる。昨年度の学力調査の結果分析においても、「自分の考えとその理由、事例を明確にして書くこと」「記述式問題や条件付き作文を書くこと」が本校児童の弱みとして挙げている。しかしながら、思いをもって活動した後の振り返りや、見方・考え方を大切にした授業の再考場面、相手意識や目的意識をもって行う「書く」活動においては、思いのこもった文章を生き生きと書く姿を見ることができる。

そこで今年度は国語科の研究4年次として、「書く」活動に焦点を当てた研究を推進したい。書くことで自分の思いや考えを可視化し、書いたものを相互評価することで自分のよさを自覚し、書いて伝達したり自己表現したりすることの大切さや楽しさに気づくことのできる子どもたちを育てたいと考える。「書く」ことの基本を身に付けさせながら、自己表現や思考する力を育てる「書く」活動を国語科を中心に、他教科や様々な活動を通して「書く」力を生かすことを目指したい。研究は国語科を中心に、他教科での「書く」活動も含める。また、研究推進の主軸は授業者一人一人の課題を明確化し、それに対する実践の手立て

を見出し、実践を積み重ね、それを共有することで学びや新たな課題につなげていくことであると考えている。

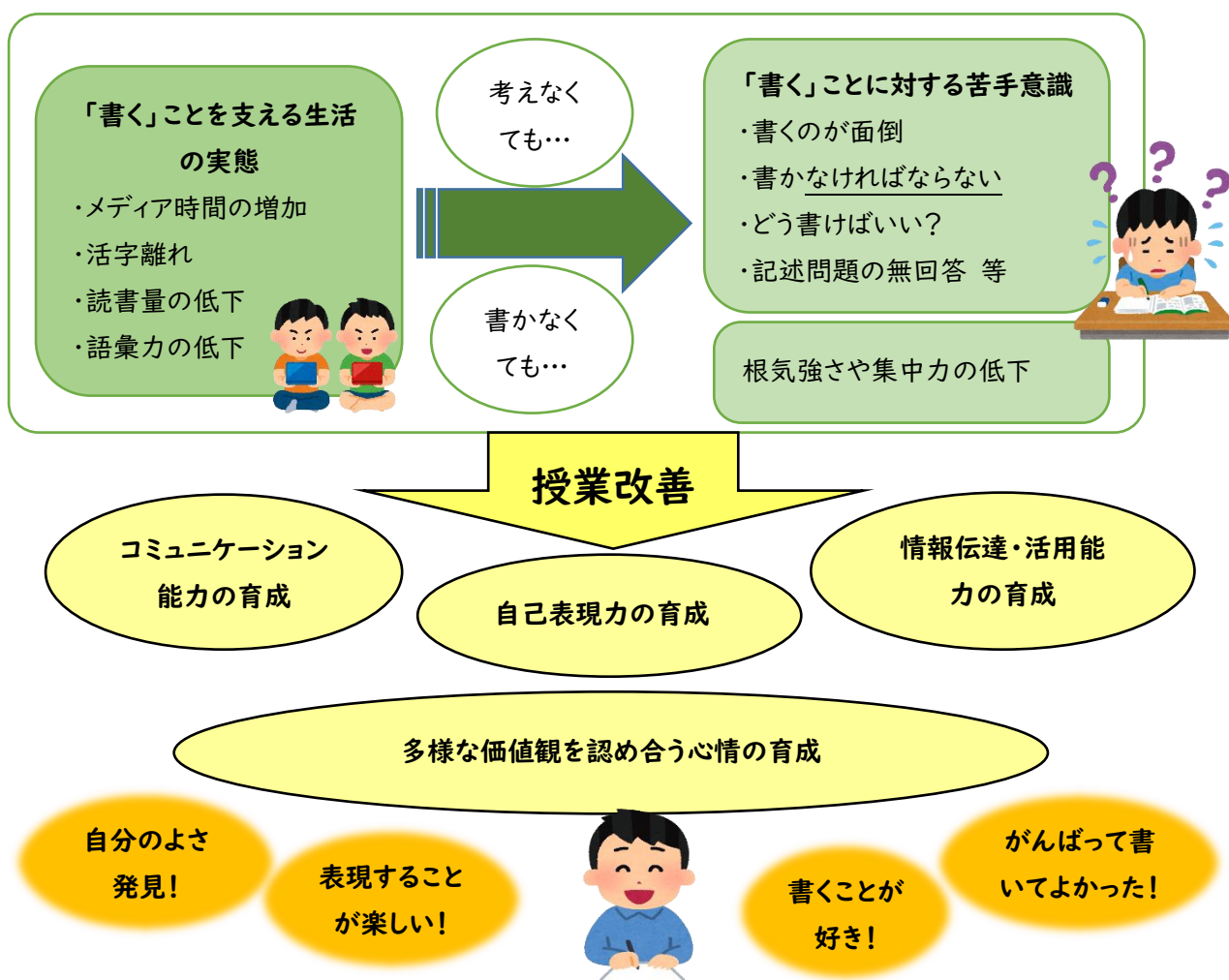
### Ⅲ 研究のねらい

個々の授業者や学校全体の課題を見出し、見通しをもった授業改善を継続して行うことで、「書く」ことが好きになり、「書く」活動を通して考える力を身につけ、自分のよさを自覚することのできる子どもたちの育成を図る。

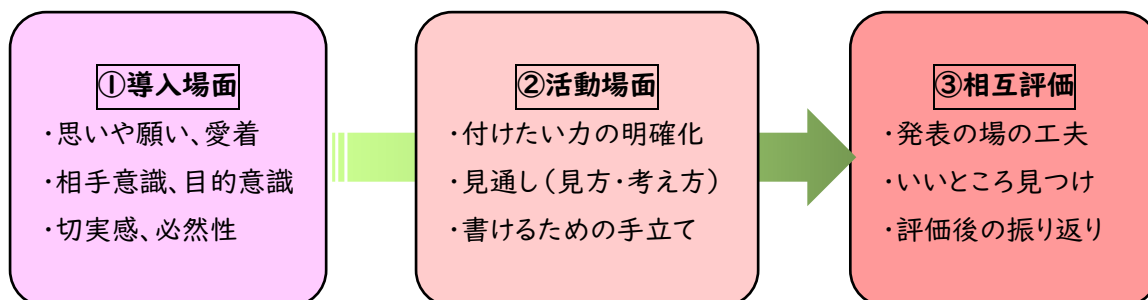
### Ⅳ 研究内容

- 子どもたちの思いや願いを大切にし、相手意識や目的意識が明確な「書く」活動の設定
- 付けたい力の明確化や見通し（見方、考え方）、手立ての工夫
- 書いたことをよかったと思えるための発表や相互評価の場の工夫
- 基礎力定着のための積み重ねの活動や書いて表現し伝え合う場などの環境整備

#### ※ 「書く」活動の必然性



## ※ 授業改善の3ステップ



「書きたい」から、深く読み取る。書いてよかった、頑張っけてよかったという達成感や満足感。

## ※「言葉への自覚を高める」とは

○『子ども自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創作的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること』(H28 中教審答申 2-2 各教科・科目等の見直し 1 国語より引用)

○具体的には… 【出典：横浜市立学校 カリキュラム・マネジメント 国語編】

- 言葉の意味を知り、状況に応じてその言葉を使い分けたり、関連付けたりする。
- 書いたり話したりするときに、言葉を吟味して使う。
- 話し言葉は、相手意識をもって選ぶ。
- 分かりやすく伝えるために、言葉を取捨選択する。
- 根拠を明確にして、主張する。
- 他者との対話や相互評価の中で、自分の考えの中に新たな気付きをもつ。

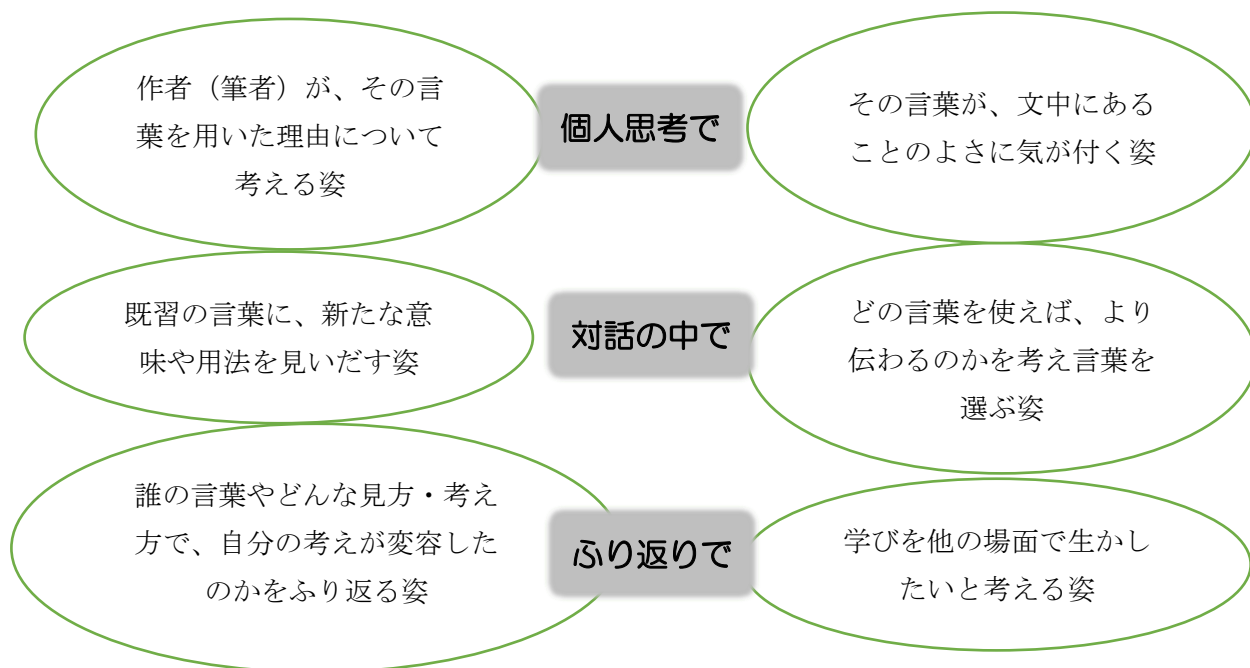
「言葉への自覚を高める」ことは、すなわち「言葉による見方・考え方を働かせている」ということ（働かせた結果として言葉への自覚が高まる。）

○「言葉への意識」を高めるために 授業において必要なこと

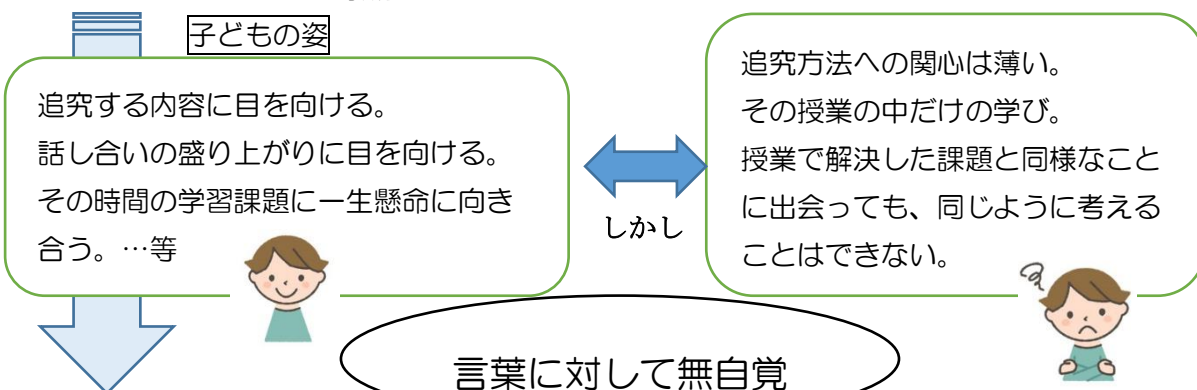
【出典：京都大学助教授 森山卓郎 寄稿】

- ①子どもが、言葉を好きになって、言葉に向き合うこと。
  - ②言葉に立ち止まる機会を作ること。(わかっているつもり言葉でも…)
- 『国語科の授業において、表現の仕方の違いや、言葉の意味、言葉の使い方などについて考えると、「言葉」というものが見えてくる。』

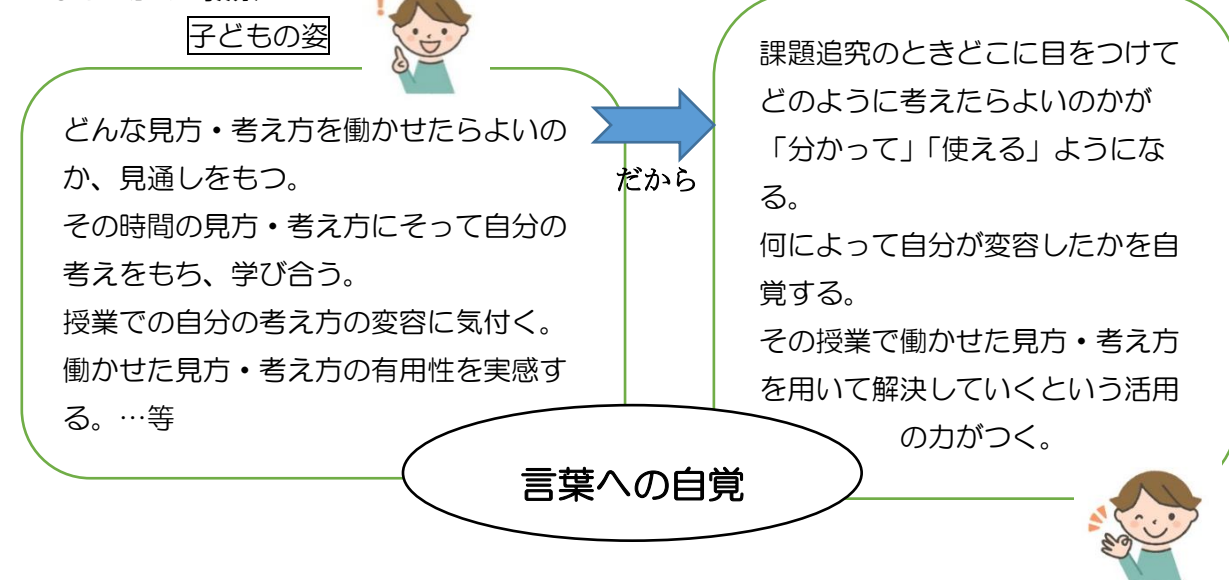
○「言葉への自覚を高める」児童の姿



○これまであいちだった授業



○これからの授業



IV 研究仮説

V 研究計画

<p>1 学期</p>	<p>○今年度の研究の方向性 ○授業者一人一人の課題の明確化 ○課題に対する見通し（改善のための手立て）</p> <p style="text-align: center;"><b>共有</b></p> <p>◆ 夏季研修会（小林先生 8 / 1 来校）</p>	<p>※児童へのアンケート①</p>
<p>2 学期</p>	<p style="text-align: center;"><b>実 践</b></p> <p>○実践報告（実践の共有）→課題に対する実践の振り返り ・自分の授業の改善点 ・自分が学んだこと</p> <p>○研究授業（学力向上訪問指導）→授業研究会</p> <p style="text-align: center;"><b>失敗や思考錯誤のプロセスも共有</b></p>	<p>※実践報告は 1 学期中に計画（一斉ではない） ※国語科を中心として、他教科も含む（どの教科においても応用可能）</p>
<p>3 学期</p>	<p style="text-align: center;"><b>改善</b></p> <p style="text-align: center;">新たな課題や見通し</p> <p style="text-align: center;">自分事の学びへ</p>	<p>※児童へのアンケート②→検証への活用</p>

VI 校内研究体制

